

若山牧水青春短歌賞 受賞者について——岡山大学HPより

文学部学生が「若山牧水青春短歌大賞」大賞受賞

本学文学部3年の伊藤けいさんが、宮崎県延岡市・市教委が全国公募している「第13回若山牧水青春短歌大賞」で最高賞の青春短歌大賞を受賞しました。他にも、文学部1年の松原真帆さん、同学部3年の佐伯美月さん、中西絵里奈さんが佳作を受賞。本学学生の大賞受賞・入賞は3年連続となります。

大賞に選ばれた伊藤さんの作品は「『101 哲学理論』のあたりより本のおいす雨の図書館」。伊藤さんは「いつも利用する図書館で、雨の日にく感じた雰囲気の違いを素直に詠んだ」と話しており、着眼点のユニークさが審査でも高く評価されました。

また佳作を受賞した3人の作品は、松原さんが「学食のアルバイトの昼『かけ』『かけ』『おろし』『ぶっかけ』『冷麺』…注文しないで」、佐伯さんが「妹と暮らし始めて二週間『早く起きて』が母の口調に」、中西さんが「『片陰』とはこんな日陰か夏の午後いつもの猫がいつもの路地に」。松原さんは慣れないバイトに四苦八苦した経験をそのまま言葉にし、中西さんは俳句をたしなんだ経験から「片陰」という夏の季語を元にイメージをふくらませ作品にしました。

4人は短歌をテーマにした文学部の講義「言語表現論」を受講。受講者は毎年、講義を通じて創作した作品を同賞に応募しています。今年度の同賞には小学生から一般まで全国から2万3463首の作品が寄せられ、伊藤さんの作品を含む3首が大賞に。伊藤さんは3月9日に延岡市で開催された表彰式に出席し、若山牧水生家なども見学しました。

第13回若山牧水青春短歌大賞:

<http://www.city.nobeoka.miyazaki.jp/display.php?cont=120416091655>

【本件問い合わせ先】

社会文化科学研究科等事務文学部教務担当

TEL:086-251-7370

(13.03.28)



大賞の伊藤さん(中央)と佳作の松原さん(左)、中西さん

小手鞠るいさんについて——吉備路文学館「小手鞠るい展」チラシより

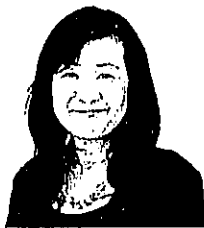
特別展

小手鞠るい展

— 愛する人にうたいたい —

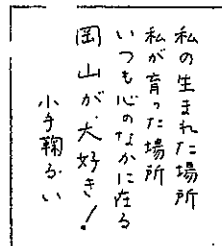
2012年11月25日(日) ▶ 2013年2月17日(日)

絵本をきっかけに「本」を読み耽り、活字に夢中の幼少時代を過ごした小手鞠るい。作文好きな少女は、中学入学とともに文芸の分野に所属し、将来は詩人が小説家になりたいたと希望していました。その子供時代からの夢を実現した彼女は、「恋愛小説の旗手」として名を馳せていますが、近年では童話、絵本、エッセイなど、様々なジャンルでの執筆にも挑戦しています。岡山で生まれ育った小手鞠るいは、現在は平成4年に移住した、アメリカのニューヨーク州ウッドストックで作品を生み出し、発信し続けています。その半生を原稿、著書、愛用品、写真等を通じて展示いたします。



<小手鞠るいプロフィール>

昭和31年岡山県備前市生まれ。同志社大学法学部卒業。昭和56年、第7回サンリオ「詩とメルヘン賞」受賞。平成5年、「おとぎ話」で第12回「海燕」新入文学賞、平成17年、『欲しいのは、あなただけ』で第12回山崎清恋愛文学賞を受賞。平成21年、原作を手がけた絵本『ルウとリンデン 旅とおるすばん』でポローニャ国際児童図書賞を受賞。ニューヨーク州ウッドストック在住。



藍染の色紙



第一作『愛する人にうたいたい』『欲しいのは、あなただけ』サンリオ/昭和57年 新潮社/平成16年

恋敵小説三部作 『エンキョリレンアイ』『サンカクカンケイ』『レンアイクッコウ』世界文化社/平成18・19・20年

大好きな猫関連の音曲

伊部焼の町で生まれ、吉備津彦神社の近くで育ち、高校時代には表町商店街をうろついていました。桃とマスカットとうどんとお好み焼きが大好きな、生粋の岡山っ子です。今はニューヨーク州で暮らしていますが、英語よりも岡山弁の方が得意です(おえりやあせんがー)。好きな言葉は「また会えたね」。本のページのなかで、吉備路文学館で、あなたにまた会えたらうれしいです。

小手鞠るい

言語表現論3(小手鞠るい担当)について—岡山大学文学部シラバスより一部抜粋

講義題目	小説作法			
学期	後期集中	曜日	時限	単位数 2
他学部学生の履修	否			
担当教員	小手鞠 るい			
授業の概要	小説を創作するための実践的な授業。毎回「文体の獲得」、「人物と舞台の設定」などテーマを決め、それについて適宜実例を挙げながら講義した後、それに即した課題を出す。授業の中で課題に応じた文章を書いてもらい、それを積み重ねて最終的には1編の短編小説に仕上げさせていただくことになる。			
学習目標	最終的に400字×30～50枚くらいの短編小説を完成させることを目標とする。具体的には、講義中に書いたものを練り上げた作品が(もしくは講義を受け終えたあと書いた作品が)、文芸誌の新人賞を受賞できるくらいになることを期待している。			
授業計画	<p>1日目(4コマ分)のメインテーマ=文体の獲得 語りの人称、時制、視点の定め方などを実作業から学び、小説を書くために必要不可欠な「道具」としての言葉、「骨格」としての文体を獲得する。作業として=授業中に実際に小説の冒頭を執筆してみる。 テキスト=『エンキョリレンアイ』 参考図書=『望月青果店』</p> <p>2日目(4コマ分)=人物と舞台設定 登場人物を創り上げ、時代や物語の舞台をととのえる。会話文と地の文の書き分け方など。作業として、1日目で書いた冒頭部分をもとに、つづきを書き進めてみる。 テキスト=『サンカクカンケイ』 参考図書=『海薔薇』</p> <p>3日目(4コマ分)=魅力的なストーリーのつくり方 あらすじを考え、プロットを組み立て、物語を構築していく。テーマ、モチーフ、作中作、謎で引っ張っていく、などなど、小説の技巧、さまざまな技術を学ぶ。2日目までに仕上げた作品の残りの展開を考え、あらすじを書いてみる。 テキスト=『空と海のであう場所』 参考図書=『誰もいない』</p> <p>4日目(3コマ分)=小説家になるためには 推敲の仕方。体験とフィクションの違い。小説家という職業。新人賞を取るためのノウハウなど。講義終了後、上記の作品を400文字×30～50枚程度の短編に仕上げる(添削を希望する人がいれば、応じます)→さらに推敲を重ねながら、長編に仕上げていく→あるいは、短編を新人賞に応募してみる。 テキスト=『早春恋小路上ル』 参考図書=『欲しいのは、あなただけ』</p>			
教科書	上記「授業計画」参照。テキストは必ず読んで、かつ授業に持参すること。			
参考書等	上記「授業計画」参照。利用法については適宜授業中に指示する。			
準備学習	授業中に適宜指示する。			